



望月珪治

1883(明治16)年、河原口村に生まれる。1911年8月、29歳の若さで海老名村助役に就任。14年11月から20年3月、28(昭和3)年5月から46年4月まで、6期23年余りの長きにわたり、海老名村・町の首長を務めた。この間の1918年4月、村役場新庁舎(現温故館)を完成させている。

30(昭和5)年8月、県知事の認可を受けて「相模川左岸普通水利組合」を設立、40年3月竣工した。これは海老名村をはじめ7町村にまたがる、幹線延長20km余という大灌漑用水工事で、望月は水利組合長として奔走した。56年5月にはその功績をたたえ、「望月珪治翁顕彰碑」が建てられている。

続いて41年、海老名耕地整理組合が設立され、暗渠排水区画整理事業を行うにあたっても指導的役割を果たし、52年、この事業を完成に導いている。その後、相模実業銀行取締役など、実業界でも重きをなした。



中山毎吉

1868(明治元)年、国分村に生まれる。生家は名主、村用掛を務め、農業・染物業を営む豪農であった。76年に国分学舎(現綾瀬市小園)に入学し、卒業後は同校の補助教員となる。その後は初等教育の教員免許を取るべく勉学に勤しんだ。90年からは郷里の啓蒙学校の訓導に就任、1902年には同校の校長に昇進した。そして海老名小学校勤務時代からは郷土史の研究を本格化させ、相模国分寺を中心とした遺跡などの調査・研究を開始した。

18(大正7)年からは、県費補助を受けて史跡や文化財の保存事業を行い、貴重な古墳や旧跡が調査・保存された。さらに24年には矢後駒吉との共著で、先駆的相模国分寺研究である『相模国分寺志』が刊行。初代「温故館」には、多くの貴重な遺物が収蔵・展示された。24年に横浜に移住して海老名から離れたが、研究熱意は褪せることなく、関係する仕事を熱心に続けた。



(北海道大学附属図書館 所蔵)

大島正健

1859(安政6)年、中新田村に生まれる。大島正徳は甥。73(明治6)年、海老名学舎に学び、翌年15歳で東京牛込の逢坂学校に入学。75年には東京英語学校(後の東京大学予備門)に入学し翌年、札幌農学校(現北海道大学)官費生の第一期生としてW・S・クラーク博士の教えを受ける。80年、北海道開拓使御用係に雇用され、農学校予科教員として後進の教育にあたる一方、札幌独立教会の建設に奔走、82年には同教会の創立を実現した。

93年、34歳で札幌農学校を辞し、同志社(京都府)などの校長を経て、1901年、山梨県立甲府中学校(現甲府第一高等学校)校長として赴任。16年、当時日本の領土であった京城府(大韓民国)の私立セプランス医学校(現延世大学校)教授として渡韓。4年後の20年に同校を辞して、府内の私立養正高等学校で教鞭をとるなど、国際的視野で研究・教育を重ねた。



鈴木三太夫

近世前期の大谷村明主であり、義民として伝えられている。本名は三左衛門で、生年は不詳である。1684(貞享元)年、時の領主旗本町野幸重の過重な年貢賦課に対して、その軽減を願ったが聞き入れられず、最後に幕府に直訴を企てるが、事前に発覚して町野氏に捕えられた。4月27日、今里村にあったと言われる町野氏の代官所で、幼い2人の子供と共に斬首され、あらかじめ離別していた妻も翌日自刃した。

市の「郷土かるた」には「農民をかばって義民三太夫」とあり、大谷の鈴木三太夫霊堂、日蓮宗妙常寺にある三基の鈴木三太夫墓石、今里の県立中央農業高校敷地内にある「義民鈴木三太夫処刑址」標柱などで、多くの市民に周知のこととなっている。1973年には大谷自治会が石碑を建立し、小島直司氏によって書きまとめられた「義民の伝記」が刻まれた。現在でも毎年4月27日には慰霊祭が行われ、供養が営まれている。